

# Family System Test の評価基準に関する検討

## ——小学生の三世代家族表現——

築地 典絵 (norie22@rf7.so-net.ne.jp)  
〔京都女子大学〕

A study of the evaluation of the Family System Test for a three-generation family: Children's cognition of family relationships  
Norie Tsukiji  
Faculty of Human Development and Education, Kyoto Women's University, Japan

### Abstract

The Family System Test (FAST) is a technique for assessing the family cognition of subjects by means of dolls which are used to imitate real family members. In previous studies in Japan, Nakami and Katsurada (2010) created a three-generation family's evaluation system for the first time. They succeeded in making new evaluation criteria; however, since the samples they tested were limited to university students only, it needs to be applied to more subjects with different generations to make their system more reliable. In this study, their system was examined to see if family cognition of younger generations can be applied to it. As a result, as far as the evaluation of family cohesion was concerned, it was appropriate to evaluate a three-generation family as one system, but as for evaluation of family hierarchy, the results obtained were different from Nakami and Katsurada. In the case of children, they evaluate a grandfather doll higher than a mother doll, which makes it clear that for the children, grandfather has more influence on them than mother has. Thus, the results in this study suggest that Nakami and Katsurada criterion requires re-examination for a new evaluation of family hierarchy.

### Key words

Family System Test, three-generation family, cognition of family relationship, cohesion, hierarchy

### 1. はじめに

Family System Test (以下 FAST) とは Gehring の考案による家族構造を診断するための査定法である。家族メンバーを木製の人形 (シンボル) で表し、基盤の目が描かれてある検査盤の上にその人形を配置させることにより、被検査者の家族構造認知を把握しようというものである (Figure 1)。FAST には「凝集性」と「階層性」という2つの指標があり、「凝集性」は人形間の距離で測定され、「階層性」は人形の下に置かれるブロックの高さで測定され

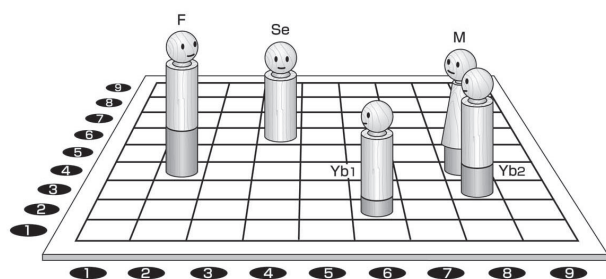


Figure 1 : FAST の配置例

(注) Se は自分、F は父親、M は母親、Yb1 は上の弟、Yb2 は下の弟を表す。

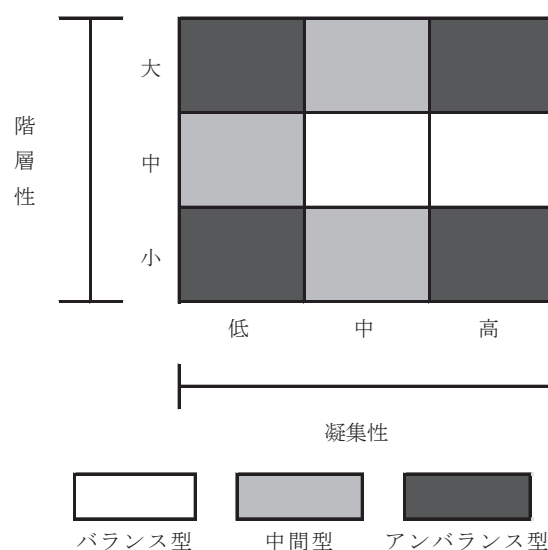


Figure 2 : Gehring による家族構造タイプ

る。また、この2つの指標の組み合わせから家族構造を3つのタイプ (バランス型、中間型、アンバランス型) に分類することが可能である (Figure 2)。

Gehring (1993) は臨床群 (家族に問題を抱えている) と健常群に FAST を実施し、家族構造を比較する研究を行った。その結果、健常群は臨床群に比べて家族全体の「凝集性」が高く、「階層性」においても世代間境界が明確であることが示唆された。そこで Gehring は、健康な家族と

は「バランスがとれた構造（凝集性が高く、親子間に適度な階層の差がある）で、明確な世代間境界があり、柔軟性がある」とし、問題を抱える家族を「凝集性が低く、極端な親子間の階層の差（親の力がかなり強い、子が親よりも強い）があり、世代間境界が不明確である」と定義した。

日本でも 1993 年に FAST が公刊されてから、査定法としての妥当性研究や臨床場面での適用が検討されてきた。これまでの日本における研究の結果、Gehring の示す 3 つの家族タイプ（バランス型、中間型、アンバランス型）に、必ずしも日本人の家族構造が適切に当てはまらないのではないかという見解に至っている（中見, 1999 ; 池田, 2001 ; 河野, 2005）。池田 (2001) では、大学生に FAST を実施したところ、「凝集性」と「階層性」がともに低く、「アンバランス型」に分類されるケースが 27 % を占めた。中見 (1999)、河野 (2005) の大学生を対象にした研究においても、「階層性」の世代間境界が曖昧で「アンバランス型」が多くなるという結果を得ている。さらに、中見・桂田 (2007) は大学生を対象に FAST を行い、Gehring の評価基準を検討したところ、日本では「階層性」が表出しにくいのではないかと考えられ、「凝集性が高ければ、階層性が低くても家族の健康度には問題がない」ことを明らかにした。築地 (2001) も FAST と家族機能を測定する質問紙 FACES III との相関を検討し、FAST の「凝集性」と FACES III の「凝集性・適応性」との間には相関が見られたが、FAST の「階層性」と FACES III の間には相関が見られないことを明らかにした。FAST の「凝集性」の指標は日本においても適用に問題はないが、「階層性」と 2 つの指標の組み合わせからなる家族タイプ（バランス型、中間型、アンバランス型）の評価基準に関しては再検討が必要であると言えるだろう。

池田 (1996) の研究では、FAST を実施した大学生のうちの 3 分の 1 が三世代家族であり、祖父母世代と残りの二世代（核家族）との凝集性が低く、そのために家族全体の凝集性が低くなったと報告されている。FAST の開発者である Gehring (1993) が三世代家族については評価基準を提示していないために、中見・桂田 (2007) は三世代家族を分析の対象から除いて研究を行っている。しかし、FAST の家族表現の中に祖父母が配置されることはよく見られる現象であり、その際に二世代家族と三世代家族の評価方法が同一でよいのかという疑問が生じてくる。FAST を用いた三世代家族の研究には、中国で実施された Shu & Smith (2001) の研究がある。小学生を対象にしたこの研究によると、凝集性においては「祖父母－孫間」は「父子間」「祖父母－親間」よりも親密であり、階層性においては親世代よりも祖父母世代の方が人形が高く、父方祖父の人形が最も高く配置されたという結果が得られた。中国においては、祖父母世代が親世代よりも影響力を保ち、孫とも距離が近く、親密な関係であると言える。

中見・桂田 (2010) は大学生を被検査者とし、三世代家族の評価基準を再検討し、新たな評価基準を提案している。それによると、凝集性は三世代家族をまとめて

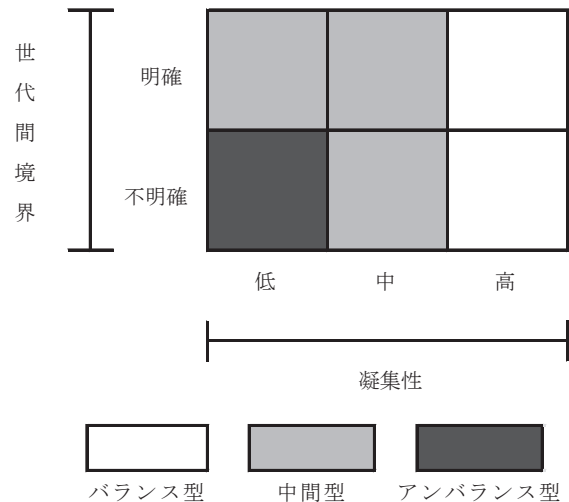


Figure 3 : 三世代の新しい分類 (中見・桂田, 2010)

Gehring の評価基準に当てはめて評価することが適していることが明らかになった。階層性の評価では、「親－子間」と「祖父母－親間」の階層性を「大・中・小」で評価し、その 2 つの階層性の組み合わせにより、「明確」「不明確」という新しい基準を作り出した。そこでは、「親－子間」の階層性が「中」で「祖父母－親間」の階層性が「親が高い」もしくは「同じ」に当てはまる家族を「明確」とし、それ以外の組み合わせを「不明確」としている。新しく開発された階層性の世代間境界を測定する「明確」「不明確」の基準と、従来の凝集性の基準の組み合わせから三世代家族の新たな分類が示された (Figure 3)。

この新しい評価基準を用い、大学生の三世代の家族構造認知を分類し、大学生の精神的健康度との関連を調べたところ、「バランス型」の家族構造認知を示した学生は、「アンバランス型」を示した学生よりも有意に精神的に健康であるという結果を得た。しかし新しい評価基準を即座に異なる年齢の被検査者に適用できるのかという点においては検討の余地が残される。中見・桂田 (2010) も述べているように、大学生の三世代家族認知では親世代と祖父母世代の世代交代が見られたが、異なる年齢の被検査者も同じようにこの世代交代を認知しているとは限らない。大学生以外の対象においても FAST を実施し、この新しい評価基準の検討がなされなければならない。

そこで本研究では、小学生の FAST における三世代の家族構造認知を分析し、中見・桂田 (2010) の研究結果から得られた大学生の家族構造認知との比較を行い、中見・桂田 (2010) によって提案された三世代家族の評価基準の再検討を行うことを目的とする。

## 2. 方法

### 2.1 被検査者

小学生の家族構造を FAST によってとらえた築地 (1999a) の研究で用いられた FAST の調査記録（大都市の公立小学校の 4 年生、5 年生、6 年生、計 81 名）の中から、三世代家族を表現した（祖父母の人形を配置した）児童

のデータを抽出した。祖父母を配置した児童は21名おり、そのうちわけは「小学生21名（6年生男子3名、6年生女子2名、5年生男子2名、5年生女子3名、4年生男子5名、4年生女子6名）」であった。

## 2.2 手続き

教示はFASTのマニュアルにもとづいて行われ、「凝集性」は人形間の距離で、「階層性」は人形の下に重ねたブロックの高さで表すことを伝え、自分の現在の家族の様子を人形とブロックを用いて検査盤上に表現することを求めた。

## 2.3 評価方法

Gehring の評価基準によると、凝集性は家族人形すべての配置により「高、中、低」の3つのレベルに評価される。家族のメンバーが縦3列、横3列の合計9個のマス内に隣接して配置されているときに凝集性が「高」、9個のマスに配置されていない人形があるが、その人形がマス内の人形と隣接している場合もしくは家族人形が縦1列、横1列に配置されている場合は凝集性が「中」、それ以外の場合は凝集性が「低」と評価される。

「階層性」は家族内の下位システム、つまり親世代と子世代の間にどれくらいの影響力の差があるかを、その大きさにより「大、中、小」の3つのレベルに評価する。具体的には、親世代のうちの階層性の小さい方の人形の高さと、子世代のうちの階層性の大きい方の高さの差が、家族内の階層性と評価される。ブロック「大」が使用されている場合はその得点を3、ブロック「中」は得点2、ブロック「小」は得点1とし、ブロックが使われていない場合は得点0となる。親世代と子世代の高さの差が3の場合には階層性「大」、1ないし2の場合に階層性「中」、0ないしマイナスの場合には階層性「小」と評価される。

## 3. 結果

まず、三世代家族の家族構造の特徴を詳しくとらえるために、凝集性と階層性を分けて分析し、その後両者の組み合わせによる家族構造の検討を行う。

### 3.1 凝集性の分類

Gehring (1993) の評価基準に従って、祖父母を含めた三世代と、親と子の二世代の凝集性を調べた (Table 1, Table 2)。大学生のデータは中見・桂田 (2010) の論文から抽出した。

祖父母を含めた三世代の評価 (Table 1) では、大学生の47%が凝集性の「低」に該当したが、小学生では48

Table 1 : 祖父母を含めた三世代での凝集性

	低	中	高
小学生	38 (8)	48 (10)	14 (3)
大学生	47 (21)	31 (14)	22 (10)

(注) 数値は%, ( ) は人数

Table 2 : 祖父母を含めない二世代での凝集性

	低	中	高
小学生	52 (11)	34 (7)	14 (3)
大学生	24 (11)	42 (19)	34 (15)

(注) 数値は%, ( ) は人数

%が「中」に該当した。祖父母を含めない二世代での評価 (Table 2) では、大学生の42%が「中」に該当し、34%が「高」に該当した。小学生では52%が「低」に該当し、大学生とは異なる結果を得た。

次に、三世代と二世代の凝集性の組み合わせを Table 3 と Table 4 に示した。大学生の分布 (Table 3) では、三世代で凝集性が「低」だった者のうち、二世代でも「低」と評価されたのは24%であり、凝集性が「中」程度の者はそのまま二世代でも「中」と表現する者が多く、「高」と表現した者もそのまま二世代でも「高」と表現する大学生が多いことがわかる。

Table 3 : 三世代の場合と二世代の場合の凝集性の分布 (大学生) (中見・桂田, 2010)

		二世代			
		低	中	高	計
三世代	低	24	16	7	47
	中	0	24	7	31
	高	0	2	20	22
計		24	42	34	100

(注) 数値は%

Table 4 : 三世代の場合と二世代の場合の凝集性の分布 (小学生)

		二世代			
		低	中	高	計
三世代	低	38	0	0	38
	中	14	24	9	47
	高	0	10	5	15
計		52	34	14	100

(注) 数値は%

小学生の分布では、三世代で「低」だった者は二世代でもすべて「低」と評価されており、祖父母を除いたことにより凝集性が高まった例は1例もなかった。三世代で「中」と評価された者は、大学生と同じく二世代でも「中」と評価された者が多かったが、「中」から「低」へ凝集性が低くなっている者が14%もおり、大学生との分布の違いが明らかになった。また、三世代の凝集性を「高」と評価された者のうち、二世代になると凝集性が「中」に低くなる者が10%を示し、この点に関しても大学生と異なる結果を得た。

このような小学生と大学生の分布の違いは、やはり被検査者の年齢が影響していると考えられる。小学生の場合、子どもの生活全般の世話を祖父母が担っている場合も多くあり、家族の中で親よりも関わりが多いこともあろうと思われる。実際に、祖父母の人形が両親の人形よりも自分の人形の近くに配置されている場合が多く、祖父母を除く二世代の分析になると「凝集性」が低くなってしまふ例が多かった。小学生にとって祖父母が親密さの高い対象であることが結果に影響していると考えられる。

### 3.2 階層性の分類

#### 3.2.1 先行研究に従った分類

まずは池田 (1996) や Shu & Smith (2001) の研究に従い、祖父母と両親をまとめて「大人」としてカテゴリ化したうえで、Gehring の評価基準に従って分類した。つまり、大人 (祖父母と両親) の人形の中で最も低い人形と、最も高い子ども人形 (被検査者やきょうだい) の差を階層性で見なした。結果は、階層性「大」は 0 %、「中」が 24 %、「小」が 76 % であった。この結果は、大学生と類似していた (「大」が 0 %、「中」が 17 %、「小」が 83 %)。

#### 3.2.2 世代間の階層性の組み合わせによる分類

中見・桂田 (2010) に従い、各世代間 (祖父母-親間と親-子間) の世代間境界について分析した。

##### (1) 祖父母-親間の階層性

「祖父母-親間」の階層性において、Gehring の評価基準 (祖父母のうちの低い方と親のうちの高い方) を用いて分析を行った。階層性はすべて「小」と評価され、大学生と結果が同じであった。そこで小学生においても、祖父母世代と親世代の間に世代交代 (親の方が祖父母よりも影響力がある) を認知していると考えられる。そこで中見・桂田 (2010) に習い、親世代の低い人形と祖父母世代の高い人形を評価の対象とし階層性を算出した (Table 5)。その結果、大学生の半数 (53 %) が「親が高い」と評価しているのに対し、小学生では半数 (48 %) が「親が低い」と表現した。

Table 5：祖父母-親間の世代交代による新たな階層性の評価

	親が低い	同じ	親が高い
小学生	48 (10)	24 (5)	28 (6)
大学生	25 (11)	22 (10)	53 (24)

(注) 数値は %, ( ) は人数

##### (2) 親-子間の階層性

「親-子間」では、階層性の「大」は見られず、「中」が 43 %、「小」が 57 % であった。大学生では「中」が 55 %、「小」が 45 % であり、小学生の方が「小」

Table 6：親-子間における階層性

	小	中	大
小学生	57 (12)	43 (9)	0
大学生	45 (20)	55 (25)	0

(注) 数値は %, ( ) は人数

に該当する割合が多かった (Table 6)。

##### (3) 祖父母-親間、親-子間の 2 つの階層性の組み合わせ

「祖父母-親間」と「親-子間」という二種類の階層性の組み合わせを検討する (Table 7, Table 8)。小学生においても大学生の結果と同様に、「親-子間」の階層性が「小」の場合には、「祖父母-親間」は「親が低い」に分類される割合が多く、「親-子間」の階層性が「中」の場合には、「祖父母-親間」は「親が高い」に分類される割合が多かった。

Table 7：祖父母-親間と親-子間の階層性の組み合わせ (大学生) (中見・桂田, 2010)

		祖父母-親間		
		親が低い	同じ	親が高い
親-子間	小	18	13	13
	中	7	9	40

(注) 数値は %

Table 8：祖父母-親間と親-子間の階層性の組み合わせ (小学生)

		祖父母-親間		
		親が低い	同じ	親が高い
親-子間	小	38	19	0
	中	10	5	28

(注) 数値は %

### 3.3 三世家族の家族関係構造の検討

次に、中見・桂田 (2010) が提案した世代間境界の「明確」「不明確」という基準に小学生のデータを当てはめてみる。中見・桂田 (2010) は、「親-子間」には「中」程度の階層があり、「祖父母-親間」には「同等」もしくは「親が高い」構造がある場合を世代間境界が「明確」と呼び、

Table 9：2 つの世代間境界による階層性の再分類 (中見・桂田, 2010)

		祖父母-親間		
		親が低い	同じ	親が高い
親-子間	小	不明確	不明確	不明確
	中	不明確	明確	明確



それ以外は世代間境界が「不明確」であると分類している (Table 9)。

凝集性の指標は Gehring の評価基準をそのまま用い、階層性は先に紹介した2つの世代間境界の「明確」「不明確」の基準を用いる。そしてこの2つの指標の組み合わせにより、6つの家族構造タイプに分類が可能になる。そこでこの新しい基準に沿って小学生のデータを分類し、大学生と比較検討してみる (Table 10, Table 11)。

Table 10 : 三世代家族の評価基準による分類 (大学生) (中見・桂田, 2010)

		凝集性			計
		低	中	高	
階層性	明確	27	16	5	48
	不明確	20	16	16	52
計		47	32	21	100

(注) 数値は %

Table 11 : 三世代家族の評価基準による分類 (小学生)

		凝集性			計
		低	中	高	
階層性	明確	14	14	5	33
	不明確	24	33	10	67
計		38	47	15	100

(注) 数値は %

大学生では「明確」と「不明確」の分布がほぼ等しいのに対し、小学生では「明確」が33%、「不明確」が67%となっており、大学生との分布の違いが明らかになった。細かく見ていくと、大学生では「明確-低」の組み合わせが最も多く(27%)、続いて「不明確-低」が多くなっている(20%)。小学生では「不明確-中」が最も多く(33%)、続いて「不明確-低」が多くなっている(24%)。この結果の違いは、小学生の方が「不明確」に分類される割合が非常に多かったことが影響しており、特に「親-子間の階層が小さく、親が祖父母よりも低いもしくは同等である場合」に分布が多かったことが影響している (Table 8)。

最後に Table 11 の結果を、三世代家族の家族構造タイプ (Figure 3) に沿って分類した (Table 12)。この分類によれば大学生は「中間型」が最も多く、「バランス型」と「アンバランス型」は同程度であった。小学生では「中間

Table 12 : 三世代の新たな分類による評価

	アンバランス型	中間型	バランス型
大学生	20 (9)	59 (26)	21 (10)
小学生	24 (5)	61 (13)	15 (3)

(注) 数値は %, ( ) は人数

型」が最も多く、続いて「アンバランス型」、最も少なかったのが「バランス型」であった。

#### 4. 考察

まず凝集性についての考察を行う。大学生においては、三世代から祖父母を除いた二世代になると、凝集性「高」の割合が増加するのに対し、小学生では「高」の割合は変化せず、凝集性「低」の割合が増加する。これは、小学生が祖父母との心的距離、物理的距離が近いということと、人形の配置パターンに起因すると考えられる。例えば、家族全員を「兄・自分・祖母・母・父・祖父」といった具合に、一列に並べて配置した場合、Gehring の評価方法によって三世代をまとめて評価すると、凝集性は「中」となる。しかし、祖父母を除いた二世代のみで評価を行うと、「自分・母」の間に空白の一マスができてしまい、凝集性は「低」と評価される。そこで小学生の場合、祖父母を含めた三世代全体を1つの家族とみなして Gehring の評価方法を適用した方がよいと考えられる。

しかし、二つの指標の組み合わせからなる家族関係構造のタイプの分類では、小学生では「中間型」に該当する割合が半数(61%)を超え最も多く、「バランス型」は15%と最も少なくなった。「中間型」が最も多い割合を占めた点においては、大学生の結果と共通しているが、残りの分布は異なる結果となった。「バランス型」は凝集性で「高」に該当することが条件であるが、凝集性の「高」に該当するには、家族メンバーが3×3の正方形のマス内に隣接して配置されなければならない。FAST の人形の空間配置について、大学生と小学生を比較検討する研究(築地, 1999b)では、小学生は人形を一直線に並べる割合が大学生の四倍となっており、非常に多いことが明らかになっている。逆に正方形や長方形のマスに入るように人形を配置したり、丸テーブルを囲んでいるように人形を配置する割合は大学生に多く、空間配置のタイプと発達との関連が示唆された。低年齢の被検査者においては、家族を表す人形を正方形のマス内に配置することが難しいといった可能性があるために、家族機能は健全であっても、凝集性が「高」の基準を満たすことが難しく、新しい評価基準における「バランス型」に当てはまらなくなるのが危惧される。

次に階層性について考察する。まず、大人(祖父母と親)と子どもとの間の階層性を分析したところ、大学生の結果と同じく、ほとんどの家族が階層性「小」に該当した。そのため、「祖父母-親間」と「親-子間」の二つの世代の階層性を別々に検討した。大学生も小学生の場合も、Gehring の評価基準に従うと、「祖父母-親間」の階層性はすべて「小」に当てはまる。そこで Gehring の階層性の算出方法とは逆に、親のうちの人形が低い方と祖父母のうちの人形が高い方の差を比較するやり方を採用した。

世代交代による新たな階層性の評価を用いると、小学生の表現する階層性は「親が低い」に該当する場合が半数を占める。世代交代を認知しているのに、「親が低い」と評価されてしまうことは、一見矛盾しているような印

象を与える。この点に関して詳しく見ていくと、たとえば、父親がブロック「3」、母親がブロック「1」、祖父がブロック「2」、祖母がブロック「0」という家族の場合を考えてみる。この家族を Gehring の基準で評価すると、祖母のブロック「0」から父親のブロック「3」を引くことになる。そうすると階層性は世代間が逆転しているために、「小」となる。新しい評価基準では、母親のブロック「1」と祖父のブロック「2」の差を算出するために「親が低い」に分類されるという具合である。FAST の記録を詳しく見てみると、「親が低い」に分類された 10 人の小学生は全員「母親」より「祖父」の人形を高く表現していたことが明らかになった。大学生の場合は、父母ともそろって祖父母よりも影響力があると認知した者は全体の 53% を占めた。小学生の場合は、祖父は父親よりは影響力は少ないが、母親よりは影響力があるという認知の特徴が見られ、大学生の結果とは異なっていた。被検査者の年齢が小さければ、祖父母も若く、家族の中での影響力が FAST の階層性の分類に表れたものと考えられる。

次に 2 つの世代間（祖父母—親間と親—子間）の階層性の組み合わせによって、家族内の世代間境界が「明確」なのか「不明確」なのかを評価しようという試みを検討する。分析を行った結果、大学生では「明確」な世代間境界を持つ家族が全体の 48%、「不明確」な世代間境界を持つ家族が全体の 52% であった。それに対し、小学生では「明確」が 33%、「不明確」が 67% となり、割合に開きが見られた。

以上の考察により、新しい評価基準の問題点として以下 2 点があげられる。①低年齢の被検査者が複数の人形を配置する場合、横一列の配置を示すことが多く、凝集性の評価が「高」に該当しにくい。このため、新しい評価方法では「バランス型」に当てはまりにくいという結果を生む。②「世代交代している」という観点が曖昧であるために、評価が複雑化していること。FAST の基準では、祖父母で高い方と両親で低い方が同じ高さの場合にも、世代交代をしているとみなされる。つまり、祖父「2」、祖母「1」、父「3」、母「2」という配置がなされた場合、世代交代もなされており、祖父母—親間の階層性は「同じ」と評価される。次に、祖父「2」、祖母「1」、父「3」、母「1」という配置がなされた場合も、世代交代はしているが、祖父母—親間の階層性は「親が低い」と評価される。この差が「明確」「不明確」を分けることになるが、被検査者の表現の多様性を大雑把に切り分けた評価になっている可能性がある。FAST の解釈において世代交代をどのように定義するのかという検討も必要であろうと思われる。

三世代家族について亀口（2000）は、日本は米国以上に各世代の人々間の体験内容に大きな差があり、一つの家族の中でも、価値観や性役割観に歴然たる世代間の差異が見受けられるとしている。三世代家族関係を査定する上でも、このような差異が重要な要素となり、祖父母世代、親世代がどのような価値観を持ち、どのような体験を経てきたのかを念頭に置くべきであろう。

さらに、亀口（2000）は近年の家族問題に言及し、子

どもの問題に家族療法家として取り組んできた実践を通して、不登校の問題では母子密着が指摘されて久しいが、多くの事例で IP と父親の関係の希薄さの背景に、自分の母親と情緒的な絆を強固に維持している父親の存在を取り上げている。同居・別居の差異に関わらず、三世代の家族関係の全体構造を俯瞰することにより、背景に隠れていたもう一つの母子関係（父と父方祖母）にも目を向けることができたとしている。FAST も三世代の家族関係を同時に把握できる点において優れており、引き続き三世代家族を扱った研究は豊かに発展する可能性を秘めていると考えられる。

また、母娘関係を扱った藤原・伊藤（2010）の研究では、成人期になっても母親への依存が過度に続くと、ありのままの自己受容をしにくく、周囲の人々や生じた出来事に柔軟に対処していく力が損なわれてしまうと述べ、成人期においてもなお「母の支配」が続くことが娘の自立性を阻む一つの要因になることを述べている。このように、家族内の力動は時代とともに質を変容させており、FAST で扱われている「親密さ」も行き過ぎれば「支配」と解釈されることもあろうかと思われる。

宮坂（2014）は近年の家族研究を概観し、家族の形態、関係性、価値観の大きな変化に伴い、先行研究で得られた知見では、家族研究を測る尺度の項目そのものが現代家族に当てはまらないのではないかと述べている。このような指摘もふまえ、FAST においても家族評価システムを固定化させることよりも、時代や文化、被検査者の家族背景に合わせて、柔軟に変容させることの方が重要ではないだろうか。

本研究では、小学生に FAST を実施し、新しい三世代家族の評価基準の検討を行った。凝集性の指標においては、祖父母を含めた三世代家族に対し従来の評価基準を適用すべきだと示唆されたが、「明確」「不明確」の基準を元に家族構造タイプを分類する評価基準には再考が必要である。今回の分析では被検査者が非常に少なかったため、今後はサンプル数を増やした計量的な評価基準の見直しと、家族内の変容する力動的な関係をアセスメントすることができる質的な研究も同時に検討する必要があるだろう。

## 引用文献

- 藤原あやの・伊藤裕子（2010）. 青年期後期から成人期初期における女性の心理的発達—母娘関係が心理的健康に及ぼす影響—. *カウンセリング研究*, 43, 33-42.
- Gehring, T. M. (1993). *Familien System Test Manual*. German, Belts Test Gesellschaft・八田武志（訳）1997. FAST (Family System Test) マニュアル. ユニオンプレス.
- 池田和夫（1996）. 日本人大学生における家族構造認知の特徴—Family System Test による国際比較—. *高知大学人文学部人文学科 人文学科研究*, 4, 11-20.
- 池田和夫（2001）. FAST による家族構造認知の異文化間比較. 八田武志編. *シンボル配置技法の理論と実際*. ナカニシヤ出版, 149-163.

- 亀口憲治 (2000). 家族臨床心理学—子どもの問題を家族で解決する—. 東京大学出版会.
- 河野望 (2005). Family System Test による家族関係の認知に関する発達的研究—小学生・中学生・大学生の比較から—. 人間発達研究所紀要, 17, 34-53.
- 宮坂遼 (2014). 子どもが認知した家族関係と子どもの抑うつ傾向との関連. 心理臨床学研究, 31, 979-987.
- 中見仁美 (1999). Family System Test (FAST) による日本の家族構造研究—大学生の親子間の親密さと力関係を通して—. 臨床教育心理研究, 25, 83-92.
- 中見仁美・桂田恵美子 (2007). 大学生における Family System Test (FAST) の評価基準の検討—面接の応答、精神的健康度の関連から—. 家族心理学研究, 21, 20-30.
- 中見仁美・桂田恵美子 (2010). 三世代家族の Family System Test (FAST) の評価基準. 家族心理学研究, 24, 42-53.
- Shu, S. & Smith, P. K. (2001). Characteristics of three-generation Chinese families. *The family System test FAST theory and application*. Brunner-Routledge.
- 築地典絵 (1999a). Family System Test を用いた児童の家族関係の研究. カウンセリング研究, 32, 264-273.
- 築地典絵 (1999b). 不応症と家族関係に関する一考察—Family System Test を用いて—. 京都女子大学文学研究科教育学専攻心理学領域 修士論文.
- 築地典絵 (2001). Family System Test の基礎的研究 I — FACES III および疎外感尺度との比較を通して—. カウンセリング研究, 34, 136-144.

(受稿 : 2014 年 7 月 2 日 受理 : 2014 年 10 月 9 日)